

旅は人 旅は人生

平等院 ~ 三室戸寺 ~ 萬福寺 ~ 伏見稻荷



長谷川 正弘

中学校時代の修学旅行以来の平等院と萬福寺、何故か再び行ってみたくなった。ちょっと京都市街から離れているし、他にまだ知らない素敵などころもあるし、一度は行ったから良いや…、でこの日まで過ごして来てしまったが、今の自分の目でもう一度あの驚き・あの感動を味わい直してみたいと思った。

但し、感動したか・どの程度驚いたかも既に記憶は断片でしかない。

そこで、いつも通り京都駅近に宿をとり、京都駅を起点に、JR 奈良線で考えていたコースの一番遠くの宇治の平等院へ行き、そこから京都に戻るコースを採った。そして、平等院と萬福寺の他はすべて初めての場所をと考えた。

修学旅行ではバスの旅故、平等院なら平等院だけと云った点の旅だったが、今回はその周辺も含めて歩くつもりで、予定通りにいかないことも想定内として漠然と考えた地図を頭に入れた。一日中、途中、道を間違えたりしながら歩きに歩いた。そしてまたこの地、実は前号繋がりでもある。何故なら平等院の在る場所は、それ以前には清涼寺ゆかりの源融(みなもとのとおる)『源氏物語』の光源氏のモデルとされる一人)の別荘が造営されていた地であるからだ…随分方々に別荘のあった人だ…其れとも遷都がらみで、別荘も移転したのか…長岡京～平安遷都…位置的にはそう考えるのが妥当なような。

平安時代の貴族などの山荘や別荘や宮跡がその後(とは言っても同じ平安時代の間にも)寺社になった例は大変多いように思う。貴族の没落傾向と寺社の政治的・社会的台頭の流れと…。逆に、寺社の歴史を調べると、もともと寺社ではなかったことが分ることは多いものである。

例えば、私が行ってみたいと言っている五位山法金剛院なども、仁明(じんみょう)天皇時代(平安時代初期)の右大臣、清原夏野が山荘を営んだ場所と言われており、

その後、平安時代の間には紆余曲折を経て、平安末の待賢門院(たいけんもんいん)の法金剛院に至っているのだ。

また、上記の通り、最近、確かに道を間違えることが多くなってきた。事前の調べが適当だったり、大凡だったりして(暇がないと云うか、家に居ないし、家に居ても…)、その中途半端な思い込みが土地勘を狂わせる。

以前は動物的とも云うべき、土地勘があり(地図を読むことで、コースの詳細を理解し、頭に入れ、想定通りの風景が眼前に開けるのを確認しつつ登った)、山道でも絶対の自信があって「こっち！」と言えたのだが、最近は大狂う。

方向音痴とも云えた同行者の方が正しい。ちゃんと看板や道標・案内を見て歩いているからだろうか。しかし「あれっ」と思って忠告はするが、聞かない私であることを知っていて、それ以上は本人(私)が納得するまで間違えたコースをそれなりに楽しんでいてくれる。

但し一方、私は他人(ひと)に尋ねる事が出来るようになったので、「あれっ」と思えば誰かに尋ねられるが、以前はそれが面倒で猪突猛進、だからこそ間違えられなかった。そして、山では尋ねるべき人と会えないこともあり得るわけで、間違えれば即ち遭難と云う可能性もあったからこそ、間違えはしなかった。言い換えれば、無数に道のある住宅街だったりするから・山でないから…間違えるのかも…は言い訳か？

さてもう一つ余談だが、このコースはJR利用がスムーズで良い。何度も言うが京都・奈良と云うと、私鉄又は市営と私営(民営)の地下鉄・バス利用が普通だが、京都～奈良間の洛南と言える地域は、昔から国鉄がきちんと要所を抑えて敷設していたのだろう。

近鉄京都線や途中変わって京阪宇治線とは概ね並行しているが、JRの方が何れ

も名所の近くに駅があり、しかも、平等院駅・黄檗駅を通る私鉄は、京阪宇治線で宇治(=京都)と大阪を結ぶ路線で、大阪に行ってしまうので、京都に向かう人は途中、中書島(ちゅうしょじま)駅で京阪本線に乗り換えなければならないのとその乗り継ぎが良い訳ではなく待たされ、兎に角面倒であることを実感した。これも調べの甘さか、折角来たからと、諸々の路線(車輛)に乗ってみようとするのが裏目に出た感があったことを最初にお伝えしておこう。



さて、JR 奈良線宇治駅で降りたのは、例によって朝早い時間で、平等院までの参道のお店はシャッターが閉まっている状態であり、平等院もまだ修学旅行生やツアー客が登場する時間ではない、開門 8 時 30 分を少し過ぎた頃。

ゆっくり、グル〜っと鳳凰堂を取り巻く阿字池を一巡する。

久々の改修成った鳳凰堂である。テレビで紹介されていたのを確認するがごとく、対岸から鳳凰堂の阿弥陀如来坐像の顔の見える位置に立って遙拝したり、鳳凰堂前に広がる阿字池に映る鳳凰堂の姿、上下対象の美しさをどの角度から見たのが最も写りが良いかとか、あれやこれやと(結局、この日はやや風があり、残念ながら鏡のような水面ではなく、上下対象の妙を撮影したかったが無理でした)…充分に楽しんだ。平等院ミュージアム(お土産・グッズ・レプリカ販売)・鳳凰館(所謂宝物館)は合体して新しくできた施設で超近代的(=現代的)だが、景観を壊さないような配慮がなされていて、自然(主に土)の中に埋もれている印象が強かった。

鳳凰堂を現在管理しているのは、浄土院と最勝院つまり浄土宗と天台宗の共同管理。概ね鳳凰堂のうしろ、左右に控えている感じで存在する、一応境内に入り参拝。一周して、北翼廊辺りに戻る。阿字池の外から北翼廊へは朱の太鼓橋(反橋)がかかっている。その手前、入り口付近から人が並んで待っている。鳳凰堂内部が見られるらしく、確か別料金を払って並ぶ。前のグループが出てきて次のグループが入って私たちがその次のグループの先頭になる。30分交代だったか、さほど待たずに、私たちの番が来た。「出来立てであり塗装も落ち着いて居ないのであちこち触るな」と注意を受け、いよいよ鳳凰堂中堂に入る。

ここに入って初めて懐かしい想いに駆られた。と云うのも、全面改修で阿弥陀如来坐像もキンキラキンになっているのかと思ったが、中堂内部はほぼ現状維持であり、主として屋根の吹き替えと柱などの塗り直し修理だったようで、雅やかな外観と異なり、懐かしい時代を経た渋さの残る大きな阿弥陀如来坐像、ある意味大仏は金箔もはがれ下地の黒漆が見える状態の個所もありで、悪く無い年輪を

感じられた。因みに、此の阿弥陀如来坐像は仏師定朝の確証のある唯一の遺作と言われている訳で、確かに国宝である。

さて、この中堂の内側の長押上の壁面には、国宝である浮き彫りの木造雲中供養菩薩像 52 軀の内半数の 26 軀が飾られて居り、残りは新築なった、近代的(=現代的)鳳翔館に保管されている。

これらに対しては、中学の修学旅行時、感動した思い出が記憶にある。極楽浄土において阿弥陀如来を讃嘆する菩薩たちの姿とする説もあるが、そのすべてが飛雲に乗っていることから、阿弥陀如来と共に来迎(らいごう)する菩薩群を 1 軀毎に夫々彫刻したものとみえる。その夫々がそれぞれ個性的で、1 軀毎にポーズも変化に富み琴・琵琶・縦笛・横笛・笙・太鼓・鼓・鉦鼓などの楽器を奏する像が 27 体の他、合掌するもの、幡や蓮華を持つもの、立って舞うもの、菩薩形の物が多いが中に 5 軀ほどは僧形の像もあり、趣味豊かな作品になっており、それに感動したのである。

他にもこの中堂内部には多くの国宝があり、壁扉画 14 面・木造天蓋など時間が許せばゆっくり 1 点 1 点、じっくり見ていたいのだが、見物のサイクルもあり 30 分程度で、次に並んでいる方々と交代…。その時間ももどかしく、戻って行かれる人もいたので、仕方がないかと思って納得したり…。

さて、平等院鳳凰堂の見学は、元来これだけのもの、既にお読みいただいた通り、我々もゆっくり阿字池周辺を一巡し、堂内も並んで待って拝観し、ミュージアムものぞき、浄土院と最勝院も参拝したので、いよいよ次は平等院周辺を目指す。朝、通った参道を開け始めたおみやげ屋さんを覗いたり、路地(まだ書いたことはないが私共、路地好きでもあります。)に入ってみたりしながら、宇治橋に出る。

宇治川の合戦を思い浮かべつつ、宇治川の流れを覗き込んだり(大丈夫、此の日は上々の天気でもとも怨霊が水中から手をのばして引きずりこんだりしそうな空気でした。但し前日は雨、水量多く流れは速かったです)しながら宇治川を渡り右折して、川縁を歩く。宇治は平等院だけではない、この右岸には幾つかの寺社があり、一番奥の興聖寺にまず行き、戻りつつ夫々参拝することにする。興聖寺は例の正伝寺や源養院に見られた、『血天井』のある寺である。

一方、1233年道元による日本最初の曹洞宗の禅寺で僧堂がある、が今在る宇治のこれは1649年再興されたもので、もともとは伏見区深草辺りにあったと言われている。参道は『琴坂』と称され、宇治十二景の一つに数えられていて、殊に紅葉シーズンは紅いもみじのトンネルになるようだが、私たちが行った時期は緑のもみじが鬱蒼として丁度良い日影を作っていた。

その坂を上ると境内は平らで開けており、参道と境内のコントラストの違いが印象的であると同時に、血天井の似合わない、明るく乾いた感じを本堂に懐いた。因みに、血天井は本堂の軒板に在り、縁に腰を下ろして見上げれば、「ああこれっ！」と感じで在り、他寺と比べると、ガードがゆるい感じがした。(因みに、ガイドブックやインターネットの情報によると、要予約とあるが、私は何となく、観られてしまった。)

再び『琴坂』を下り、宇治川沿いの遊歩道に戻り、茶屋などを通り過ぎて次なる恵心院へまた上る。上ったり下ったりを繰り返す観光である。恵心院の開基は空海であり、真言宗智山派の寺院である。ご本尊は十一面観音だそうだが、本堂の扉は締まっており、見られなかったと思う。お庭には、結構多くの植物が植えられており、ほかに参拝者もおらず、草木を心ゆくまで楽しめるお寺で、ゆっくりできた。

また、遊歩道まで戻り、次は宇治神社と宇治上神社を参拝。

宇治神社と宇治上神社は本来は一つの神社であったようで、兄弟神社と理解すればよいようだが、宇治上神社には実は日本最古の本殿(国宝)と国宝の拝殿(鎌倉時代)を持っており、一見の価値がある。祭神はウジノワキイラツメノミコト、応神天皇、仁徳天皇である。そもそも、この地は応神天皇の離宮のあった場所であり、その皇子ウジノイラツメノミコトの宮居でもあった。

父、応仁天皇はこの皇子を次期天皇にと思ったが、ウジノワキイラツメノミコトは儒教思想に基き、兄に天皇位を譲るべく自ら自害し果て、その兄が仁徳天皇として即位すると、弟の霊を慰めるため、この神社をたてたのだそうだ。実は世界遺産でもあるが、平等院の観光客の何パーセントが近くにあるのだが、ここまで足を延ばすのか…。

ここからコースを変え、『さわらびの道』を北へ辿り、三室戸寺を目指すことにする。

『さわらびの道』と云う名に惹かれただけなのであるが、宇治からは離れる事として、次なるシーンへ移動。住宅街を途中、『源氏物語ミュージアム』や京都翔英高等学校の前を通り、『JR 三室戸寺駅』から延びるやや広い道に出る。ここで道を間違えた。

宇治川に流れ込む小川に惹かれて、つい川沿いの道(遊歩道)を歩いてしまい、後になって地図で確認すると、ある意味少し逆戻りをした感



じになったようだ。通りがかりの自転車の方に教えて頂き、元に戻り軌道修正。

この『三室戸寺』については、特に事前の知識もなかったが、ここまで来たら行っておくべき寺と云う認識はあったような…、西国三十三所第10番札所(嘗ては、33番札所つまり最後の札所であったようだ)、本山修験宗の別格本山となっている。山腹の広い敷地が構造的に2段に分かれており、下の谷間の開けた一帯は紫陽花が植えられ立派な紫陽花園がつくられ、シーズンにはかなりの集客を見込んでいるようだ。その上の段の開けた台地に本堂他、阿弥陀堂、三重塔等と池泉回遊式庭園(与楽園)があり、庭園の木々草花、桜・つつじ・シャクナゲ・蓮・諸樹の紅葉等々、此処も京都の『花の寺』の一つと云う事になる。

ご本尊は千手観音像だそうだが、実はよく覚えていない。

さて、三室戸寺の明星山を下り、JRの「三室戸寺」駅へ。本当はもう少し歩いて、周辺の寺社を見るつもりもあったが、時間的に、もう一つの目的地萬福寺への時間を考えると、寄り道は難しく思えた。

従って、次なるスポット『黄檗山 萬福寺』へ移動。

何だかいつの間にか、バスの旅と変わらなくなってきている。JR奈良線で北上して次の駅が「黄檗」駅である。私が萬福寺で覚えているのは、山門から本堂に至る参道の敷石。正方形の石板の角の対角線が参道の縁石に並行になるように置かれ、参道と辺が平行になるような置き方をしていなかった点であり、実はそれだけなのである。

鎌倉でいうと、駅裏の寿福寺(英勝寺だったか)の参道がその様であったと覚えているが、実はここも、ある時期改修が在ったのか、現在参道中央の石畳はいつの間にか違ってしまっている様に思う



そう、そのように強い印象のあった萬福寺の参道の敷石も、「あれっ！」って感じで、三門前の一部にあったものの、記憶とは違った感じを受けてしまった。

実は、帰って写真で確認したら、結構写してあって長い距離敷かれてあった様な…。何で物足りなく感じてしまったのか…。敷石の違和感は兎も角、観光客と云える人はほとんど居なかった境内をグルグル巡り歩き、記憶にとどめた。

若いお坊さんがふぎけあいながら、掃除をしているのも見たり、研修中の社会人一年生らしきスーツ姿の男女が列をなして宿泊座禅研修にやって来たのを眺めたり…。

無論、境内もちゃんとみました。総門を入ると右手に放生池があり、ウシガエルが鳴いていた気がした。三門をくぐると、その正面に天王殿、その奥に大雄宝殿、更にその奥に法殿が東から西へと一直線に並んでいたり、諸堂の間を回廊が繋いでいたり、回廊の途中に巨大な分厚い魚型の板があったり。

これを叩いて(食事)知らせるものらしいが、後の木魚の前身とも言われているとか。日本的でないムードがそここにあり面白く、かなり時間をかけて拝観した。

因みに、私の住む吉祥寺の井の頭公園にも昔、分厚い板でできた、おそらく鯉がぶら下がっていた。これを叩いて池の鯉を呼ぶのである。

何故呼ぶかと言えば、そこに鯉のえさが売られているからであった。

さて帰りは、違う電車でと思い、同じ駅名だが少し離れたところにある、京阪宇治線と云う路線の「黄檗」駅から乗ってみた。

しかもそこで、ついでに伏見稲荷に寄って帰ろうとなった。そうであるなら尚の事、JRでそのまま乗って行けば、効率もよかったのに、少しでも色々な路線の色々な車両を楽しみたくもあり欲をかき、最初に書いた通りになったのであった。

実は有名な伏見稲荷も、何か私の寺社の趣味とは違うと云う感じで避けてきており、私は初めて。

何が何だかわからず無数の鳥居の中を登りに登った。

非常に人が多く、外国語があれこれ飛び交い混じり、日本人も他のアジアの国の人に見える。一日の疲れもあって、ヒーフー・ハーフー、やっとのことで四辻まで…、この日はここ四辻から剣石を目指し、見た目直ぐ下っている左の道から回って、かなりの疲労感を残した。

因みに、その後また行った時は(リベンジ)、前回の結果をもとに、体力のある午前中に行き四辻で右側からの道で剣石を目指し、結果余裕で回ることができ、一回目には目に入らなかったものや風景も目に入った。



例えば、この2回目の時は沢山の裏白を背負った職人さんたちが下りてくるのに出会った。正月も近いある日で、「あ〜」正月飾り(輪飾りなど)を作って売るのがだとすぐに解った。

そんな時期でもありやや雨降りの天気でもあったので、流石の伏見稲荷も空いており、初詣の準備に忙しい様子等も観ることができた。

因みに、この伏見稲荷に二度目に行った時は、テーマが「京都の師走を観る」だったからである…。

京都・奈良の寺社巡りも或る時期までは、行った事のない寺社を巡り古き時代の面影に浸る、歴史的背景と照らして、教科書(歴史のみならず美術も)の復習と云うか体験学習の様な拝観=見学の仕方をしていたように思う。要するに、修学旅行的観光とでも云った処だった。

最近は何度も行っている寺社も増え、だけど「もう一度…」みたいなお気に入りも出来、説明板も何度も読み、パンフレットも同じものをいくつか持ち、時代背景などは何となく解ってしまっている。

そうなるに幾らなんでも同じスタンスでは行けなくなる。となった時に、これまでと違った括りで見直してみる、と云う方法がある事に気が付いたと云うか、実は同行者に教えられたと思っている。

葬儀やらなんやらが一落着きした12月後半、たまたまいつもの駅近の宿がとれ、何の予習もせず、日曜の夜、仕事を終えて大急ぎで帰宅し車を置いて、予めから用意してあるバッグを持って、前夜泊1泊(計2泊)の京都行を決行。

「今回は、何処と云うより、京都のクリスマスから暮れ・正月準備の様子を観ましよう」と言われた事があった。

言い換えれば何処かへ行かなくても、祇園辺りを八坂神社や丸山公園を含めて、良く知っているいくつかの寺と町の様子を一日ブラブラ見るので良く、「〇〇へ行かなくちゃ！」感もなく、ただ暮れの空気を感じるって良いじゃないと思った。そんな流れの中で、例えば私は弘法大師空海縁の寺院を巡ると云うテーマを考え、実践した。これは一回で済むものでもなく、何回かに分け、他のテーマに入れ込む形を採った。

そして、寺を拝観し見学すると云うより、寺を巡りつつ、夫々の場所で空海さんを感じれば良くて、これまでの学習的な回り方とは変わり、寺巡りの在り方を違えることができた。

また「京都の櫻を見る」も試みた。

櫻を見るですから、櫻があれば鴨川の畔だっていいわけですし、寺社の櫻だって櫻を主に見れば良いことで参拝そのものは従的に考え、そこに櫻が咲いている一年間の一瞬のその景色そのものを楽しみ感じて良い事に気付いた。

ですから切り口色々でテーマ設定はできるはずなので、趣味や興味に合わせて良く、レポートも広がる…。

例えば、巨木のある寺社巡りとか、庭園を巡るとか、十一面観音像を探すとか、京都右京区花園を巡るでも、東山界隈を歩くでも、花の寺と呼ばれる寺を巡るでも、寺社門前の老舗お茶屋を巡るとか、本当に自分流に何でも良いはず…。

鎌倉・京都・奈良等々を尋ねる時、ある程度マスターしたらこの様に、ちょっと違った括りのテーマでコース内容の集約し直しをしてみると、また違ったものが見えて来る様に思っている。

そう気が付けば確かに、常に鉄道というテーマは別枠で持った旅でした、何か当たり前になっていて、それもそうと云う事を忘れてしまっていた。

久良岐便り第48号

発行

社会福祉法人久良岐母子福社会